

〔一〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

### ポスト世俗化とポスト社会主義

科学技術が発達し社会が近代化すると宗教のような「迷信」はやがて消え失せる——こうした世俗化論が今や過去のものとなってしまったことはよく知られている。アメリカで台頭する福音派・キリスト教原理主義。イスラーム国やタリバンに代表されるイスラーム原理主義。むしろ近代による世俗化を経て、宗教は再活性化している。現代社会は、まさにハーバーマスが唱えた「ポスト世俗化社会」(二〇一五年)であるといっている。

ソ連に代表される旧社会主義国は、社会主義的無神論の下、国家によって上から「世俗化」が行われたことで知られる。その一方で、社会主義を生き抜いた一般の市民にとって世俗化とは何だったのか。あるいはソ連崩壊後(一九九一年)の「ポスト世俗化」とは、どのよう<sup>ア</sup>なものだったのか、といった問いに対して十分な答えは出ていないように思われる。

多くのポスト社会主義の宗教現象に関する研究では、社会主義時代を通じて宗教実践が「抑圧」<sup>A</sup>されてきたことを自明の事実として扱い、ポスト社会主義となり宗教は劇的に「復興(リバイバル)」したものと捉えてきた。社会主義期の宗教実践に関しても、宗教は公的空間から追放された結果、私的空間に隠棲<sup>せい</sup>した——家庭内でのみ宗教行事を行った——という議論が一般であった。

なるほど社会主義崩壊以降、ロシアではロシア正教が、カザフスタンやウズベキスタンといった中央アジア諸国ではイスラームが「復興」を遂げている。しかしそこに欠けているのは、上からの無神論(世俗化)政策とは異なる次元で生じる、連続的な人々の宗教実践への視点である。

そもそも「ポスト社会主義」の「ポスト」<sup>B</sup>という語は、必ずしも終わってしまった連続性のない現象をさすわけではない。例えば、コロナアルとポストコロナアルの関係を考えてみよう。ポストコロナアルといえば、植民地時代に始まった支配—被支配の関係が終わって旧植民地がまったく自由になったことを意味するわけではない。むしろアフリカや南米諸国といった「コロナアル」を経験した国々は、欧米から政治的に独立したものの、いまだ経済的に旧宗主国の支配下にある。それが

「ポストコロナル」である。しかし「ポスト社会主義」といったとき、社会主義の遺産がどれだけ考察されてきたのか。とりわけ宗教に関しては、社会主義期の遺産は等閑視されてきたといつてよい。

実はロシアや東欧、モンゴルなどの旧社会主義圏では、驚くほどオカルトや呪術が興隆している国が多い。それに対して従来の宗教の「抑圧―復興」論は説明する術をもたない。これに対してここで提示するのは、実は社会主義とは宗教や近代システムの呪術化だったのではないか、という仮説である。社会主義の呪術化は大きく二つに分かれる。第一に宗教の制度的部分(教会や寺院といった宗教組織、神父や僧侶といった聖職者、聖書や経典といった聖典など)が社会から隔離された結果、むしろ宗教の持つ非制度的側面、つまり呪術的側面が強化されたという「宗教そのものの呪術化」である。第二に社会主義が築いた近代諸制度が現地の人々に超自然的な「呪術」として理解されたのだとする「社会主義的近代の呪術化」である。この社会主義⇨呪術化論は、社会主義時代とポスト社会主義時代の宗教実践の連続性を説明できるだけでなく、ポスト世俗化の議論を考える上で新たな素材を提供できるのではないだろうか。

そこでこのショウコウ<sup>ウ</sup>では、世界で二番目に社会主義国となったモンゴル国(旧モンゴル人民共和国)を事例に、彼らの伝統宗教であったチベット・モンゴル仏教とシャーマニズムを事例に旧社会主義圏の世俗化とポスト世俗化を考えてみたい。モンゴル人はそもそもシャーマニズムを信仰してきたが、清朝の支配下に入った一七世紀後半以降、チベット仏教が急速に広まった結果、人々は二〇世紀初頭には男性人口の三分の一が僧侶になるくらい、仏教に心酔した。社会主義を経た現在も人口の六割程度が仏教徒だと言われている。その一方で、仏教に押されシャーマニズムはマイノリティの宗教として残ったが、二〇一〇年頃には、モンゴル国民の人口の1%近くがシャーマンになるほど、流行した。

### 社会主義の中で生き残るシャーマニズム

二〇世紀初頭、ロシアやモンゴルにおいて「科学的無神論」を標榜<sup>ほう</sup>する社会主義政権が樹立すると、宗教は社会主義の無神論的立場から弾圧されていく。そもそもマルクスは社会主義社会へ移行すれば、宗教は自然に消えていくとする「宗教の自然死」を想定していた。しかしソ連の指導者レーニンはそれを信じておらず「近代化のために宗教を無くさなければなら

ない」と読み替えていった。したがって一九三〇年代、教会や寺院は破壊され、聖職者は還俗<sup>げん</sup>させられていった。モンゴルでは多くの僧侶が社会主義建設の敵である「黄色い貴族」とされシユクセイ<sup>エ</sup>されていった。黄色い貴族とは、チベット仏教ゲルク派(黄帽派)からつけられた呼び名である。こうして寺院の持っていた家畜群は国家に没収<sup>D</sup>され、化身ラマ(転生活仏)の多くは銃殺されていった。一方、シャーマニズムも「迷信」「偽医学」「前近代の残滓<sup>し</sup>」であるとされ、その活動は禁じられた。

ただし社会主義時代を通して宗教は均質的に弾圧されていたわけではない。一九三〇年代に吹き荒れた宗教弾圧は第二次大戦中から緩和されるようになる。確かにキリスト教や仏教、イスラームといった制度宗教は、その活動に厳しい制限がかけられたが、宗教組織、聖職者、聖典といった宗教の制度的部分を社会から隔離しようとした結果、むしろ宗教の制度的側面から漏れる部分は強化されていったのである。

イギリスの社会人類学者キャロライン・ハンフリーによると、ソ連(現ロシア)の南シベリアに住むモンゴル系の民族ブリヤートにおいて、制度宗教である仏教がその制度性ゆえに破壊された一方で、非制度的なシャーマニズムが相対的に社会主義に依存しながら補完的に生き残ったのだという。チベット・モンゴル仏教は、イデオロギーがあり官僚的な僧侶の組織や生産組織(家畜群や畑)をもっていたのでソビエト共産党と競合<sup>E</sup>する関係にあった。そこで共産党によって仏教教団は徹底的に弾圧・破壊され仏教寺院の財産や生産手段も没収された。ところが寺院や聖職者の組織や生産組織を持たないシャーマニズムは、イデオロギーや制度性という点で共産党と競合しない。むしろソビエト・イデオロギーが労働の価値や生産性といった肯定的な価値にコシユウ<sup>オ</sup>したせいで、災厄の説明など否定的な価値をシャーマニズムが補完的に担当し得たのである。わかりやすく言えば、ソビエト共産党は五カ年計画に代表される「未来」を語ることで、日常生活における病气や災害、人の死の理由を説明することができない。これに対してシャーマンたちは「森の精霊が怒っている」といった「理由」を説明することで人々の精神的な支えとなり、生き残りに成功したのである。

同様にモンゴル国においても社会主義時代、シャーマニズムは滅んだのではなく、シャーマニズムを支える思考法が、人々の心の中で生き続けた。モンゴルの東部地域に住まうモンゴル・ブリヤート人の例でいうならば、何か病气や災厄が身

に降りかかると「ルーツ(先祖霊)に(シャーマンになって彼らを祭祀するように)ねだられている」と決まったかのように考えた。このパターン化された思考法が、社会主義時期を通して人々の間で共有されていたからこそ、シャーマニズムは命脈を保ったのである。

### 化身ラマと呪術としての社会主義

一方、ロシアと異なりモンゴルでは、人民革命党と競合関係にあるはずの制度宗教が呪術として生き残ることとなった。社会主義時代に編纂された国史『モンゴル人民共和国史』の第二版(一九六九年)にも「僧侶であった児童・青年たちの中から党や国家の活動家・さらに偉大な指導的人物さえもがハイシュツした」とある。つまり、多くの還俗僧が国家の中枢を担ってきたのである。というのも社会主義革命直前のモンゴルでは男性人口の三分の一が僧侶であった。読み書き能力がある彼らを排除して新国家の建設は不可能だったのである。

こうして社会主義時代、還俗したラマたちの多くは、学校教師や地方の役人などへと姿を変えていった。そして人々はいえ、密かに呪術儀礼を還俗したラマたちに施してもらっていた。モンゴルでは、今も社会主義期も仏教は日常生活の中で呪術実践という形で広く浸透している。わかりやすく言えば、彼らにとって仏教との一番の関わりは、厄除けのためにラマに経を読んでもらうことにある。この読経のことをモンゴル語では「ノム・オンシヨラハ(経を読んでもらう)」という。一方、僧侶の側からすると、こうした読経のことを「グルム・ザサル」と呼んでいる。グルムはチベット語でザサルはモンゴル語であるが、どちらも治療や厄除けといった意味である。

したがって人々の仏教の教義に対する関心は極めて低い。この点では日本と似ているといえよう。ただし厄除けとさえ日本では神社であるが、モンゴルでは仏教寺である。これに加えてモンゴルでは、厄年など決まったときに寺院を訪れるのではなく、何か困ったことがあればヒンパンに寺を訪れてラマに経を読んでもらう。例えば家族が病気になるったり、仕事がうまくいかない、あるいは人間関係に悩みがあるといった場合、モンゴルの人々はまずは寺院へ向かい経を読んでもらう。逆に何も問題がないときは、彼らは寺院に寄り付かない。つまり「困ったときのラマ頼み」、これがモンゴルでの仏教信仰

の一番の特徴であるといつてよい。したがってラマの読経が「効かない」と判断されれば、人々は簡単にシャーマンや、時にはキリスト教にさえ乗り換えていく。一般の人々にとって大事なものは即効性のある呪術なのであって、教義云々（えんぎん）ではないのである。こうした厄除けのための読経は、呪力が強いラマであるほど効力があるとされる。モンゴル語で「ノムトイ・フン」すなわち「経典や学問がある人」と言った場合、単純に知識ではなく、なんらかの神通力がある人物だと理解される。そういった「ノム（経典）のある僧侶」の中でもとりわけ力があるとされるのが、化身ラマたちである。

社会主義期、幼少時に「化身ラマ（転生活仏）」と認定されながら、還俗し社会主義時代、ネゲデル（牧畜共同組合。モンゴル版のホルホーズ）の物資配給担当者（アーゲント）として生き抜いた人物がいた。還俗ラマ、ツェレンドンドブ（一九一九〜一九九六）、通称「アーゲントさん」である。彼は、一一世紀後半から一二世紀にかけて活躍したチベットの有名なヨーガ行者、カギユ派の宗祖ミラレバ（一〇五二〜一一三五）の四代目の転生者とされたことから「ミロ聖人（mirobogd モンゴル語でミラレバのこと）」とも呼ばれた。

彼が党の地方幹部としておこなった政策は、地元の人々たちによって、活仏の呪的能力の高さゆえに成功したと考えられた。また「地域の子どもたちが病気になる」と、公衆の面前で角砂糖をくれて『これを飲んでおきなさい』とだけ言ったが、本当に元気になった」などと人々は話す。角砂糖と言えば、モンゴルの人々が社会主義時代に初めて口にしたものである。本来、遊牧民であった彼らは、二〇世紀に始まる社会主義による近代化を迎えるまで、肉と乳製品のみのお食事に親しみ、野菜はもちろん穀類や砂糖といった糖質をほとんど取ってこなかった。おそらく調子の悪いとき、貴重な糖分を取ることで人々は栄養ドリンクを飲むがごとく、体力を回復させていたことであろう。重要なのは、そうした「角砂糖」が元化身ラマによってもたらされたという点である。

こうした社会主義と仏教の重なり合う現象は、ザブハン県に限られたものではなかった。モンゴルでは、社会主義期に多くの僧侶が還俗の後に学校教師として再就職したことで知られている。実はモンゴルでは、今も昔も僧侶のことを「バクシ（bagshi 先生）」と呼ぶ習慣がある。このバクシという語は、学校の教師を呼ぶときにも使われる言葉でもある。その一方でモンゴル人はダライラマのことを、敬意をこめて「ダライ・バクシ」と呼ぶ。すると、かつてのラマたちは社会主義時代

を通して学校の教師になることで、以前と変わらずに「バクシ」と呼ばれ尊敬を受けたのだった。こうした「バクシ」たちに人々は、子どもが生まれるとチベット名を名付けてもらったり、密かに占いしてもらったりしていたのである。ミロ聖人Ⅱアーゲントさんの事例は、化身ラマであったという点で特殊ではあるものの、おそらくこうした数あまたの還俗ラマのひとつだといってもよい。ちなみにモンゴルでは、ソ連の指導者レーニンのことも「レーニン・バクシ」と呼び習わしてきた。そこに宗教的な含意Gがないとは、誰も言い切れないだろう。

つまり社会主義時代、少なくともモンゴルにおいて宗教は、一九三〇年代に熾烈しな宗教弾圧を経験したものの、その後、まったく私的空間に隠棲したわけではなかった。完全に家庭内に閉じこもったわけでもなかった。宗教の制度化された部分(寺院、経典、宗教的職能者など)が社会から排除された結果、宗教は、呪術的な部分(観念も含む)に特化して社会空間の中で生き残っていったのである。何よりも「社会救済」するという点において、仏教と社会主義は、物語を共有していた。つまり仏教と社会主義イデオロギーは、ぶれた二重写クしの写真のように重なり合って現象化していったのだった。

おそらくミロ聖人本人も、どこまでが仏教的な呪術でどこまでがアーゲントとしての仕事だったのか明確な区別はついていなかったかもしれない。少なくともミロ聖人Ⅱアーゲントさんは、衆生済度のための「方便」として社会主義を意図的に利用した可能性は否めない。いずれにせよ、ミロ聖人Ⅱアーゲントは、呪術と近代知の交じり合う身体として、人々の前に立ち現れていた。すなわちこの地域の人々は、化身ラマⅡ社会主義のアーゲントを媒介にして、「社会主義という呪術」／「社会主義に密かに実践された仏教呪術」という二重の呪術を受け入れていたのである。

このような二重の呪術化を経て一九九〇年代初頭、社会主義は崩壊し、宗教の自由が保障されるようになった。そうした中、制度宗教の「復興」よりも進んで呪術やシャーマニズム、オカルトが活性化したのは、そもそも社会主義的無神論が生み出した社会自体が、多分に呪術的であったからではないだろうか。さらにポスト社会主義時代、仏教の聖なる山の祭祀を大統領が行ったり、ミロ聖人の祭祀を郡政府が行ったりするなど、政教分離ならぬ「政教協働的」な現象が見受けられる。これらも呪術化した社会主義との連続性の中で理解できる事柄なのかもしれない。

(島村一平「モンゴルの仏教とシャーマニズム」)

問一

「『ポスト世俗化』とは、どのようなものだったのか」とあるが、「ポスト世俗化」に関する筆者の意見として最も  
適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

1

1 ソ連に代表される社会主義時代を通じて家庭内などに抑圧されてきた宗教実践が、社会主義崩壊後、公的な  
場においても劇的に復活した。

2 政治的な支配―被支配の関係が終わっても、旧植民地はまったく自由になったのではなく、いまだに旧宗主  
国の経済的支配下にある。

3 ロシアや東欧、モンゴルなどの旧社会主義圏では驚くほどオカルトや呪術が興隆している国が多いが、その  
背景を従来の宗教の「抑圧―復興」論では説明できない。

4 一九九〇年代初頭、社会主義は崩壊し、宗教の自由が保障されるようになった結果、制度宗教の「復興」の  
おかげで呪術やシャーマニズム、オカルトが活性化した。

5 そもそも社会主義的無神論が生み出した社会自体が多分に呪術的であったので、社会主義が崩壊した後もシ  
ャーマニズム、オカルトに対する民衆の信仰の強さは変わらない。

6 仏教の聖なる山の祭祀を大統領が行ったり、ミロ聖人の祭祀を郡政府が行ったりするなど、政教分離ならぬ  
「政教協働的」な現象が見受けられる。

問二

「抑圧」<sup>A</sup>の反対を意味する語として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

2

- 1 励行    2 精励    3 奨励    4 増長    5 増大    6 増加

問三

「ポスト」<sup>B</sup>の反対を意味する語として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

3

- 1 旧    2 新    3 元祖    4 分派    5 以前    6 以後

問四

「等閑視」の意味として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

4

- 1 ひまだとみなすこと
- 2 静かに受けつぐこと
- 3 平和だとみなすこと
- 4 軽蔑すること
- 5 おろそかにあつかうこと
- 6 平等にあつかうこと

問五

「宗教そのものの呪術化」に関する説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

5

- 1 ソ連に代表される旧社会主義国においては、社会主義的無神論に従い、国家によって上から「世俗化」が行われたということ。
- 2 モンゴルの社会主義期には、宗教は公的空間から追放された結果、私的空間に閉じ込められ家庭内で宗教行事を行っていたということ。
- 3 モンゴルでは仏教に押されてマイノリティの宗教となっていたシャーマニズムが、二一世紀になり国民の人口の1%近くがシャーマンになるほど流行したということ。
- 4 宗教組織、聖職者、聖典といった宗教の制度的部分を社会から隔離しようとした結果、むしろ宗教の制度的側面から漏れる部分は強化されていったということ。
- 5 社会主義イデオロギーが労働の価値や生産性について語る一方、シャーマニズムは日常生活における病気や災害、人の死の理由を説明することで補完的な役割をはたしたということ。
- 6 社会主義時代もシャーマニズムを支える思考法が人々の心の中で生き続け共有されていたからこそ、シャーマニズムは生き残りに成功したということ。



問六 「シヨウコウ」「シユクセイ」「コシユウ」「ハイシユツ」「ヒンバン」の漢字と、同じ漢字を含むものを、次の中から一

つ選べ。

6

10

ウ 1 ビコウが広がる 2 記録のコウシン 3 コウレイの出し物

4 記事をとウコウする 5 社会にコウケンする 6 コウバイ意欲

エ 1 ハクシユクとは兄弟のことだ 2 シユクシユクと処理する 3 シユクガンをかなえる

4 百周年のケイシユクを伝える 5 過去の偉人にシシユクする 6 キンシユク財政

オ 1 セシユウ制度 2 意見をイッシユウする 3 シユウタイをさらす

4 技のオウシユウ 5 ガシユウにとられる 6 アイシユウを感じる風景

カ 1 神をスウハイする 2 シユクハイをあげる 3 部活のドウハイ

4 出来事のハイケイ 5 反対派をハイセキする 6 制度のハイシ

キ 1 ライヒン席 2 足シゲく通う 3 ヒンピョウ会

4 シキりに外をうかがう 5 セイヒンの思想 6 カイヒン公園

問七 「没収」の「没」を用いた熟語として正しいものを次の中から一つ選べ。

11

1 没一物 2 没交渉 3 没尽蔵 4 没人情 5 没文律 6 没礼講

問八 「競合」の「合」を用いた四字熟語として正しいものを次の中から一つ選べ。

12

1 合胆無比 2 離合集散 3 外柔内合 4 自合自得 5 合岸不遜 6 叫喚呼合

問九 「命脈」の「命」を用いた熟語として、正しいものを次の中から一つ選べ。

13

1 命惑至極 2 百家争命 3 正真正命 4 天地神命 5 大義命分 6 安心立命

問十

「含意」の読みとして、正しいものを次の中から一つ選べ。

- 1 こうい      2 こんい      3 かんい      4 がんい      5 ごんい      6 ごうい

14

問十一

「仏教と社会主義イデオロギーは、ぶれた二重写しの写真のように重なり合って現象化していった」の具体的説明として最も適切と思われるものを次の中から一つ選べ。

15

- 1 モンゴルでは、今も社会主義期も仏教は日常生活の中で呪術実践という形で広く浸透しており、彼らにとって仏教との一番の関わりは、厄除けのためにラマに経を読んでもらうことにある。
- 2 モンゴルでは、一般の人々にとって大事なのは教義ではなく即効性のある呪術であり、厄除けのための読経は呪力が強いラマであるほど効力があるとされる。
- 3 モンゴルでは、化身ラマが社会主義的組織の幹部としておこなった政策は、地元の人々たちによって、活仏の呪的能力の高さゆえに成功したと考えられた。
- 4 モンゴルでは、社会主義期に多くの僧侶が還俗後に学校教師となり、人々は子どもが生まれると名付けてもらったり、密かに占いをしてもらったりしていた。
- 5 モンゴルでは、僧侶も学校の教師もソ連の指導者レーニンのことも「バクシ」と呼び習わしてきたのは、シヤーマニズムの教えがあったからである。
- 6 モンゴルでは、宗教は、厳しい弾圧を経験したものの、完全に家庭内に閉じこもったわけではなく、呪術的な部分に特化して社会空間の中で生き残っていった。

問十二 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

16

16

の欄に、二か所マークすること

- 1 アメリカでのキリスト教原理主義や中東でのイスラーム原理主義の影響を受け、モンゴルにおける仏教やシヤーマニズムも近代による世俗化を経て再活性化している。
- 2 社会主義崩壊以降ロシアや中央アジア諸国では制度宗教が復活しており、上からの無神論政策がなくなったことにより、人々が宗教実践を再開したと考えられる。
- 3 モンゴル系の民族ブリヤートにおいて、寺院や聖職者の組織や生産組織を持たないシヤーマニズムは、官僚的な僧侶の組織や生産組織をもつ仏教と競合する関係にあった。
- 4 社会主義時代、牧畜共同組合の物資配給担当者として生き抜いた還俗ラマがおり、チベットの高名なヨーガ行者であり僧侶であるダライラマの転生者とされた。
- 5 モンゴルでは、今も昔も僧侶のことを「バクシ」と呼ぶ習慣があり、このバクシという語は、学校の教師や社会主義の偉人を呼ぶときに使われる言葉でもある。
- 6 ミロ聖人は、衆生済度のための手段として社会主義を利用したかもしれないが、彼は呪術と近代的社会主義の知の重なり合う存在として、人々に受け入れられていた。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

### 社会史・心性史からのインパクト

家族研究の領域において、パースンズ式の集団論的パラダイムが根底から揺るがされる契機となったのは、フランスの歴史学者P・アリエスらによる社会史・心性史研究であった。さまざまな図像学的資料や文字資料を駆使しつつ、中世から一八世紀の西欧において、子どもと家族に対する人々の意識がどのように変化してきたかを明らかにした。

アリエスの議論の一部を紹介すると、可愛がりや教育といった特別な配慮が必要な《子ども期》という観念が成立すること、家族のなかで子どもが中心的な位置を占め、家族の全エネルギーが子どものために費やされること、家族が情緒的に強く結びつきあうことがひとつの重要な価値として社会的に強調されること、家族が外の世界から隔絶されたプライバシーの空間となること——これらはみな近代に特有な現象であり、中世には見られなかった特徴である。またこうした近代的な家族のかたちは、ブルジョワジーや貴族層では一八世紀頃に形成されるが、それが庶民階級へ浸透するのはかなり後のことである。ある規範的な家族のあり方が社会的に広まってゆく過程には、明確な階層差が存在するのだ。

またカナダの社会史研究者E・ショーターは、一八―一九世紀のヨーロッパの庶民階級における家族経験の変化を分析し、近代の家族を最も鮮明に特徴づけるのは愛情の規範化であると論じた。近代化の進行とともに、夫婦間ではロマンチック・ラブが重視され、子どもに対しては母性愛が何よりの優先事項となり、そこからプライバシーで遮蔽された家族の情愛の価値を謳いあげる家庭愛の言説が爆発的に広まっていく。この家庭愛の言説の広まりにもやはり階層差があり、中流階級では一八世紀末、庶民階級では一九世紀末頃となる。

このように、愛や親密性が重視されるのは、家族の本質でも普遍でもなく、歴史的に特殊な一類型にすぎない。家族とは愛によってつながりあった親密な共同体であるという「ゲメインシヤフト」的な祖型は、実は西欧近代が生み出した新しい理想の型なのだ。階層差があることから、それが人間の「本質」や「自然」に根差したものではないことがわかるだろう。

## ジェンダー・フェミニズム研究からの知見

加えて、一九八〇年代以降のジェンダー・フェミニズム研究の蓄積は、パソンズ式の集団論的パラダイムが前提としていた夫婦の性別役割分業にも根本的な疑問符を突きつけていく。例えば経済的には夫に依存しながら家事や育児などの再生産労働に専念するという意味での主婦の存在は、近代資本主義の進展のなかで形成され、制度づけられたものである。それ以前の庶民階級の妻は生活のために働いていたし、中上流階級では家事は使用人の仕事であった。主婦が存立するためには、生活水準の向上によって家庭内の家事や育児の要求水準が一定以上に達していなければならないし、夫のみの片働きで一家が養えるほどに男性雇用者の賃金水準が高くなっていることも不可欠である。さらに近代産業社会の成立以前には生産領域と再生産領域がはっきりと分離しておらず、生産活動と再生産活動の境界もあいまいだったため、それらを男の労働と女の労働とにきつちりと配分すること自体が困難だった。「女は家庭で家事・育児に専念する」として生産領域から厳密に区分された再生産領域がもつばら女性に割り当てられ、また「男は外で働き家族を養う」として生産領域での稼得責任がもつばら男性に配分されるような、いわゆる「男は仕事、女は家庭」というかたちの性別役割分業は、生産領域と再生産領域が明確に分離された近代において初めて可能になったのである。まさに幾重もの意味で、主婦とは近代の産物なのだ。

さらに、ジェンダー・フェミニズム視点による数々の歴史研究は、近代における母性概念の構築と制度化のプロセスを詳細に解明した。その嚆矢となったフランスの哲学者E・バダンテールは、一七〇一―一八世紀フランスの都市部では生まれた子を田舎へ里子に出す慣習があらゆる階層で極めて一般的だったこと、またフランスではユウフクイな人びとが乳母を雇う慣習が一三世紀から広く見られていたことを挙げ、子育てが母以外の手によっても担われてきた長い歴史を明らかにする。そのうえで、一八世紀末―二〇世紀にかけて「育児は母によって行われるべき」「母性は生得的に女性に備わる」という言説が出現し、流布し、女性を家庭内に閉じこめていく過程を詳細に論じた。こうした母性規範の定着にはやはり階層差があり、家庭内で育児に専念する母をショウヨウウする言説は、生活にゆとりのある中産階級では一八世紀末に形成されるが、妻が一家の重要な働き手だった貧しい庶民階級の人びとにとっては、二〇世紀初頭まで無縁のものであった。

バダンテールの研究の主眼は、「母性＝女性の本質」という強固なジェンダー観の脱構築にあるが、それと同時に「子ど

もの社会化が家族の普遍的機能である」とするパーソンズの定式の否定材料としても読みうるだろう。歴史的に見れば、子どもの社会化は必ずしも家族の専売特許とは限らなかったのだ。

爾来、日本でも、中世～近代初期にかけて広く見られる墮胎や子殺し、捨て子や貰い子や勘当、乳母や共同体や父による子育てといったさまざまな事例研究から、子どもの社会化をめぐる多角的な検証が重ねられている。

### 近代家族論の蓄積

日本の家族社会学でも、一九八〇年代末～一九九〇年代頃に、このような社会史の知見とジェンダー・フェミニズム研究の知見が統合されるかたちで家族理論が大幅に見直され、落合恵美子や山田昌弘らによって「近代家族論」として結実した。

近代家族とは、近代に特有な家族のあり方を指す用語だが、そのネーミングには「私たちが当たり前だと思っている家族のかたちは歴史的に特殊な一類型にすぎないのだ」という反省的な自覚が込められている。近代家族の特徴についてはさまざまな議論が展開されたが、主要なポイントは山田昌弘が整理した以下の三点にまとめられよう。

まずは、①家族が外の世界から隔離された私的領域となることである。中世や近世の家族の生活は、地域共同体のなかで家族以外の多くの成員による介入と援助を受けることで成り立っていたが、近代の家族はこうした外部との相互浸透を遮断することで、プライバシーに守られた私的領域として自閉していく。このことは家族の親密性の特権視につながり、さらに切り離された私的領域に再生産労働を割り当てる近代型の性別役割分業の前提要件にもなった。

次に、②家族の生活はすべて家族自身が責任を負わなければならないという自助原則の存在である。①の特徴によって外部からの介入／援助をソウシツするため、家族成員の生活保障責任はすべて家族自身が負うことになる。この自助原則は近代型の性別役割分業と結びついており、実践面では経済的な稼働責任が夫に、家事・育児といった再生産労働の責任が妻に課せられる。

最後に、③家族の情緒的な結びつきを不可欠なものとして重視する、愛情の規範化である。ここで問題となるのは個人の実現以上に、社会的な規範の水準である。アリエスが強調したように、家族の親密性が社会のレベルにおいて規範化され、

価値づけられるという意味において、近代家族は愛情中心主義なのである。

そして、こうした近代家族のたちが近代国家による統治の基礎単位として戦略的に制度化されたことも、忘れてはならない重要な特徴である。ただし先述のように、近代家族が広まる過程には、同じ近代国家の内部においても明白な地域差や階層差があった。日本ではこうした家族のあり方は大正期の都市部の新中間層でいち早く形成されるが、それが一般化するのには、社会全体の生活水準が底上げされた戦後の高度経済成長期である。家族の近代化の浸透度合いには、社会的属性によって明確な違いがあったのだ。

### 「今・ここ」の偏りを自覚する

ここで注意しておくべきは、近代家族が「標準モデル」として社会的に制度化・規範化された時代においても、近代家族的ではない生き方をする人は常に存在しつづけていたことである。例えば専業主婦になる女性が最も多かった一九七〇年代にも共働きの夫婦はいたし、離婚が最も少なかった一九六〇年代にも離婚によるひとり親家庭はあった。養子や里子については一九六〇年代までのほうが現在よりはるかに多かった。同じ日本のなかでも、時代によって、あるいは人びとの階層や職業によって、また各人の生い立ちによって、家族のバリエーションは非常に大きい。家族とは元来多様で可塑的なものだ。

しかし近代家族の広まりは、人びとが家族をとらえる認識枠組を、近代家族流のものに変化させた。そのことによって進化したのは、「標準モデル」の名のもとに近代家族以外の家族のあり方を周辺化・病理化させるまなざしである。それは社会学者も例外ではない。パーソンズ式の集団論的パラダイムのもとで、性別役割分業は「機能的」として理論的に正当化＝正統化されたし、夫婦の離婚はイッダツと見なされた。当時は量的に「標準モデル」の家族が多かったからそうした理論が妥当だった、という主張は退けられるべきだろう。理論において量的なタカはあくまでも二次的な評価規準であり、重要なのは現実の複数性をどのような認識枠組で概念化するかの問題である。もし一九七〇年代頃の日本の家族がすべて「標準モデル」であったかのように感じるのであれば、それは眼前の家族が一様であったからなのではない。一様であるかのような

色眼鏡で家族を見ていただけだ。

近代家族論が社会学にもたらした最大のインパクトは、家族の普遍性の否定であった。マードックの核家族普遍説が人類学の内部から否定されたように、 Parsons が定式化した機能面での家族の普遍性は、これによって社会学の内部からも明確に否定されるようになってゆく。「近代家族」というネーミングには、「今・ここ」の偏りを自覚し、己の体験の素朴な特権視を戒める社会学的な視線が刻印されている。

価値自由のまなざしをもって日本の家族の近代性を分析することで、「今・ここ」ならではの問題点がどのような経緯で生じたのかを詳細に明らかにし、必要な対応策を考えること。近代家族論の蓄積を経た現在、それこそが今後の社会学に求められる課題ではないかと思う。

### 「個人化」と「多様化」の議論

それでは、近代社会における家族は、今後どうなっていくのだろうか。

近年の家族研究においては、近代家族的な「標準モデル」に当てはまらないさまざまな家族への注目が進み、個人化と多様化が指摘されている。

ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックは、再帰的近代化が進行した「第二の近代」における社会と個人の関係の構造的な変容を「個人化」として概念化し、その典型例のひとつとして家族を挙げた。ベックによれば、第二の近代において、社会は産業化によって自らが生み出したさまざまな社会問題に再帰的に対処する必要があるため、社会それ自身がリスクとなる(リスク社会の到来)<sup>F</sup>。それに伴って、国家や階級や家族、性別役割といった従来の制度は解体し、さまざまなリスクや社会的矛盾への対処法は個人によって直接選択・決定されねばなくなる。このような個人化社会において、家族は従来の制度的な拘束力を失い、「ゾンビカテゴリー」となる。欧米産業社会における家族の個人化の根拠としてよく挙がるのは、未婚化・晩婚化・少子化のほか、離婚・DINKS<sup>(注1)</sup>・事実婚・婚外子・同性婚・選択的夫婦別姓などである。これらはそれまで認められなかったか、例外扱いされていた家族形式の合法化である。



日本では一九九〇年代後半以降の社会経済的な転換とともに、共働き世帯や離婚の増加、未婚化、晩婚化、少子化といったさまざまな現象が生じてきた。そのなかで家族の多様化が指摘され、またベックの議論を導入した山田昌弘らによって家族の個人化も論じられている。さらにこれらの議論が同時期のポストモダン論と結びつき、「近代家族は終わった」という見方も多く語られた。またジェンダー・フェミニズム研究の視座からは、性別役割分業が解体した後には家族ではなく個人を単位とする社会が出現するとして、それを「家族の個人化」といち早く名づけた目黒依子のような立場もある。

しかし、そのいっぽうで、現在の日本では近代家族的な価値観は未だ解体していないという見方もある。例えば出産・育児期に仕事をやめる女性労働者の多さや、女性の非正規雇用率の高さ、また夫の家事育児時間の少なさや育児取得率の低さといった面では、今も変化が見られない。異性愛を前提とした法律婚の制度や、強制的な夫婦同姓制度も根強く、初婚を継続していない家族が直面するさまざまな社会的不利益も消えていない。こうした状況を勘案すれば、近代家族型の性別役割分業を前提とする社会のあり方が、根本から変化したとはいえない。

また個人化の証左とされている現象にも、慎重な解釈が必要である。例えば離婚の増加は、従来の価値や規範の解体のみを一義的に意味するとは限らない。たしかに離婚でひとり親になることは性別役割分業の履行不可能性につながるが、離婚の際に子どもが母方に引き取られる割合はこの六〇年間もつばら増加しつづけている。これは母親の経済力の脆弱さよりも母性という価値のほうがはるかに重視されるようになった、近代家族的な心性の証左とも読みうる。

このような現代の日本において、個人化や多様化は本当に起きているのだろうか。もし仮に起きているとすれば、それはどのような水準で起きているのだろうか。

(野田潤「家族社会学」)

(注1) DINKS — 結婚後、子供を持たずに、夫婦とも職業活動に従事するライフスタイル。double income no kidsの頭文字をとった略称。

問一

「パーソンズ式の集団論的パラダイムが根底から揺るがされる」とあるが、「パーソンズ式の集団論的パラダイム」を揺るがした研究それぞれの説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

17

- 1 歴史学者アリエスによれば、特別な配慮が必要な《子ども期》という観念の成立、家族が外の世界から隔絶されたプライベート空間となることなどは近代に特有な現象ではない。
- 2 社会史研究者ショーターによれば、家族とは愛によってつながりあった親密な共同体であるという言説は、西欧や中東に見られる理想であり、人間の「本質」や「自然」に根ざしたものではない。
- 3 ジェンダー・フェミニズム研究によれば、近代以前の中上流階級の妻は生活のために働き、家事は奴隷の仕事であったので、「主婦」という存在は近代の産物であるとのことである。
- 4 ジェンダー・フェミニズム研究の蓄積は、近代以前にはまだ生産領域と再生産領域が明確に分離しておらず、夫婦の性別役割分業は近代産業社会において初めて可能になったことを明らかにした。
- 5 哲学者バダンテールによれば、母性規範の定着には階層差があり、家庭内で育児に専念する母という存在は生活にゆとりのある階層には二〇世紀初頭まで無縁のものだった。
- 6 バダンテールの研究は、「母性≡女性の本質」という強固なジェンダー観の脱構築ではなく、「子どもの社会化が家族の普遍的機能である」とするパーソンズの定式の否定を主眼とするものである。

問二

「ユウフク」「シヨウヨウ」「ソウシツ」「イツダツ」「タカ」の漢字と、同じ漢字を含むものを、次の中から一つ選べ。

18 ) 22

イ 1 対立をユウワする 2 将来をユウリヨする 3 暴動をユウハツする

4 ヨユウある対応 5 シユウを決する 6 ユウゼンとした態度

ウ 1 ミンヨウを歌う 2 友人をヨウゴする 3 氷がヨウカイする

4 ドウヨウを隠せない 5 イキヨウヨウとした気分 6 チユウヨウの徳

オ 1 ブツソウな出来事 2 無味カンソウな文章 3 未知とのソウグウ

4 マイソウを終える 5 意気ソウ 6 不安をイツソウする

カ 1 天下のイツザイを発見する 2 イツワりの仮面 3 傷がイタむ

4 死者をイタむ 5 カクイツ的な指導 6 わが子をイツクしむ

キ 1 しがないカギヨウ 2 カジヨウ書き 3 カコンを残す

4 カセン状態の市場 5 スンカを惜しむ 6 責任テンカ

問三

「流布」の「流」と同じ読みを含むものを次の中から一つ選べ。

23

- 1 長雨
- 2 川柳
- 3 納涼
- 4 留守
- 5 感涙
- 6 端麗

問四

「近代家族論」に関する説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

24

- 1 近代家族とは、近代に特有な家族のあり方を指す用語だが、そのネーミングには「私たちが当たり前だと思っている家族のかたちは歴史的に存在しない一類型にすぎないのだ」という反省的な自覚が込められている。
- 2 近代の家族は外部との相互浸透を遮断することで、プライバシーに守られた私的領域として自閉し、家族の親密性を特権視し、切り離された私的領域の中で力を合わせて生きていく家族の団結心を強化した。
- 3 外部からの援助を排除したため、家族の生活保障責任はすべて家族自身が負うことになり、経済的な稼得責任も、家事・育児といった再生産労働の責任も夫と妻に課せられることになった。
- 4 家族の情緒的な結びつきを不可欠なものとして重視する、愛情の規範化が家族のひとりひとりの内面に価値づけられるという意味において、近代家族は愛情中心主義である。
- 5 国内においても明白な地域差や階層差があったにもかかわらず、外部の遮断・自助原則・愛情の規範化などの近代家族のかたちが国家による統治の基礎単位として制度化された。
- 6 近代家族の広まりは、人々に近代家族以外の家族のあり方を病理化させるまなざしを持たせ、「標準モデル」から外れた家族に対する治療が始まった。

問五

「遮断」の「遮」を用いた四字熟語として正しいものを次の中から一つ選べ。

25

- 1 会遮定離
- 2 平面描述
- 3 遮二無二
- 4 遮交辞令
- 5 新陳代遮
- 6 白遮青松

問六

「可塑的」の反対を意味する語として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

26

- 1 不当な
- 2 不条理な
- 3 不変な
- 4 不平等な
- 5 不実な
- 6 不確実な

問七 「素朴」<sup>D</sup>の反対を意味する語として、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

- 1 純粹
- 2 洗練
- 3 悪質
- 4 未熟
- 5 総体
- 6 特別

27

問八

「経緯」<sup>E</sup>と同じ意味で用いられるものとして、最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

- 1 サクセス
- 2 プラクシス
- 3 デイスタンス
- 4 アクセス
- 5 プロセス
- 6 カタルシス

28

問九

「個人化と多様化」<sup>F</sup>に関する説明として最も適当と思われるものを次の中から一つ選べ。

29

- 1 ベックによれば、産業化によって生じたリスクや社会的矛盾への対処法は個人によって直接選択・決定されることがなく、家族は従来の制度的な力を失ってしまう。
- 2 欧米産業社会における家族の個人化の根拠としてよく挙がるのは、未婚化・晩婚化・少子化のほか、離婚・婚外子・里子・同性婚・選択的夫婦別姓などである。
- 3 日本では一九九〇年代後半以降の社会経済的な転換とともに、共働き世帯や離婚の増加、晩婚化、少子化、DINKS、事実婚といったさまざまな現象が生じてきた。
- 4 日本では家族の多様化、家族の個人化の現象がみられ、ポストモダン論と結びつき「近代家族は終わった」という見方が定説となった。
- 5 異性愛を前提とした法律婚の制度や、強制的な夫婦同姓制度も根強い状況を見ると、現在の日本では近代家族的な価値観は未だ解体していないともいえる。
- 6 個人化の一例とされている離婚の増加に関しても、子どもが母方に引き取られる割合が増加している点は母性という価値が重視されるようになったという点で、揺り戻し現象の可能性がある。

問十

「到来」の「到」を用いた四字熟語として正しいものを次の中から一つ選べ。

- 1 不偏不到
- 2 象牙之到
- 3 精神一到
- 4 意气到合
- 5 一騎到千
- 6 荒到無稽

30

問十一

「勘案」の意味として、最も適切と思われるものを次の中から一つ選べ。

- 1 よく考え耐えること
- 2 考えを変えること
- 3 新しい考えを取り入れること
- 4 深く掘り下げて考えること
- 5 あれこれを考え合わせること
- 6 準備し提案すること

31

問十二 本文の内容に合致するものを、次の中から二つ選べ。

32

32

の欄に、二か所マークすること

1 家族の全エネルギーが子どものために費やされることなどは近代に特有な現象であり、中世には見られなかった特徴である。こうした近代的な家族のかたちは、ブルジョワジーや貴族層では一七世紀ごろに形成されるが、それが庶民階級へ浸透するのはかなり後のことである。

2 主婦が存立するためには、生活水準の向上によって家庭内の家事や育児の要求水準が一定以上に達し、夫のみの片働きで一家が養えるほどに男性雇用者の賃金水準が高くなっている必要がある。それに加えて西欧キリスト教文化圏特有の現象として生産領域と再生産領域がはっきりと分離している必要がある。

3 日本の中世〜近代初期にかけて広く見られる墮胎や子殺し、捨て子や貰い子や勘当、乳母や共同体や父による子育てといったさまざまな事例研究からも、「子どもの社会化が家族の普遍的機能である」とするパーソナルの定式は説得力を失ってきたといえる。

4 中世や近世の家族の生活は、地域共同体のなかで家族以外の多くの成員による介入と援助を受けることで成り立っていたのに対し、近代の家族は家族の情緒的なつながりを重視し、それが社会のレベルにおいて規範化され、価値づけられることで愛国主義も強化されていった。

5 日本では、出産・育児期に仕事をやめる女性労働者の多さや、女性の非正規雇用率の高さ、また夫の家事育児時間の少なさや育児取得率の低さといった面から、近代家族型の性別役割分業を前提とする社会のあり方が、根本から変化したとはいえない。

6 現代日本の個人化の証拠として、未婚化、晩婚化、離婚の増加、少子化などが挙げられ、母親がシングルで子育てをするための公的な援助が求められている。さらに、今後は事実婚のカップルにも法的な保障を与えることが検討されている。

次の〔三〕の問題はクリエイティブイノベーションシヨクを受験する者、またはクリエイティブイノベーションシヨクと映像学科を併願する者のみ解答すること。



〔三〕 次の文章は平安時代の物語『夜の寢覚』の一節である。八月十五日の夜、姉君と箏の琴を演奏していた中の君は、夢の中で天人から琵琶の秘曲を授けられる。次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「この残りの手の、この世に伝はらぬ、いま五つあるは、来年の今宵下り来て教へたてまつらむ」とて失せぬと見たまひて、X、暁がたになりけり。琵琶は殿も習はしたまはぬものなれば、わざと弾かむとも思はぬに、習ふと見つる手どものいとよくおぼゆるを、あやしさに、琵琶を取り寄せて弾きたまふに、大臣聞きたまひて、「こは、いかにかく弾きすぐれたまひしぞ。めづらかなるわざかな」と、あさみおどろきたまひつれど、夢をば、恥づかしくて、なかなか語りつづけず。

(中略)

またの年の八月十五夜になりぬ。いと静かなるに、端近く御簾巻き上げて、宵には例の箏の琴を弾きたまひて、人静まり夜更けぬるにぞ、琵琶を、教へるままに、音のあるかぎり出だして弾きたまへれば、(注2) 姉君、「つねに弾きたまふ箏の琴よりも、これこそすぐれて聞こゆれ。昔よりとりわき殿の教へたまへど、つねにたどどしくてえ弾きとどめぬものを、あさましき君の御様かな」と、聞きおどろき、うらやみたまふ。例の御殿籠りたるに、ありし同じ人、「教へたてまつりしにも過ぎて、A あはれなりつる御琴の音かな。この手どもを聞き知る人は、えしもやなからむ」とて、残りの手いま五つを教へて、「あはれ、あたら、人のいたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」とて、帰りぬと見たまふに、この手どもを、覚めて、さらにとどこほらず弾かる。あさましう、思ひあまりて、姉君に、「夢に琵琶を教ふる人こそあれ」とばかりきこえたまへど、なかなか語りつづけたまはず。

(注1) 箏の琴 —— 箏は琴に近似する楽器。「琴」は弦楽器の総称として用いられている。

(注2) 姉君 —— 後に出る「姉君」と同一人物。

(注3) 殿 —— 「大臣」と同一人物。

問一

空欄

X

に補うのに最も適当なものを次の中から一つ選べ。

33

- 1 おどろきたまふれば
- 2 おどろきたまへれば
- 3 おどろきたまはば
- 4 おどろきはべらば
- 5 おどろきはべれば

問二

傍線部 a～e の文法的な説明として **適当でないもの** を次の中から一つ選べ。

34

- 1 a の「ぬ」は、打消の助動詞「ず」の連体形である。
- 2 b の「ば」は、順接仮定条件の接続助詞である。
- 3 c の「なる」は、形容動詞の活用語尾である。
- 4 d の「れ」は、下二段動詞「聞こゆ」の活用語尾の一部である。
- 5 e の「たまふ」は、「姫君」を敬意の対象とする尊敬の補助動詞である。

問三

傍線部ア～オのうち、「中の君」が琵琶を演奏することを示しているものの組み合わせとして正しいものを一つ選べ。

35

- 1 ア・イ・オ
- 2 イ・エ
- 3 ア・エ・オ
- 4 ウ・オ
- 5 イ・ウ・オ

問四

「<sup>A</sup>教へたてまつりしにも過ぎて、あはれなりつる御琴の音かな」という会話部分の内容の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選べ。 36

- 1 天人が教えた琵琶の曲以上に、中の君は素晴らしい琵琶の演奏をしたということ。
- 2 殿が教えた箏の曲以上に、中の君はしみじみ趣深い琵琶の演奏をしたということ。
- 3 殿が教えた琵琶の曲以上に、中の君は胸打たれる箏の演奏をしたということ。
- 4 天人が教えた琵琶の曲以上に、中の君は大変見事な箏の演奏をしたということ。
- 5 殿が教えた箏の曲以上に、中の君はとても悲痛な箏の演奏をしたということ。

問五

「<sup>B</sup>えしもやなからむ」の意味として最も適当なものを次の中から一つ選べ。 37

- 1 まさかいはしないはずだ
- 2 恐らくいなのではないだろうか
- 3 必ずしも多くはないのではないか
- 4 いてはならないはずではないか
- 5 ありえないのではないだろうか

問六

本文の説明として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

38

1 父の大臣は中の君が琵琶を見事に演奏するのを聞いて、どうして自分が教えた通りに演奏しないのかと驚き、中の君を問い詰めた。

2 天人が再訪を約束した翌年の八月十五日、中の君は宵のうちは箏の琴を弾いていたが、他の人々が全員寝静まると琵琶を弾き始めた。

3 姉の姫君は中の君が琵琶を弾くのを聞き、殿に教わっても上手に弾けなかった妹がどうして急に上手になったのかと不思議に思った。

4 天人は翌年の八月十五日にも来訪して秘曲を教えてくれたが、目覚めた中の君はその曲を記憶していて、自然にすらすらと演奏した。

5 中の君は自分が大臣に夢の中で琵琶を教わったことや運命を予言されたことを姉の姫君に伝えようとしたが、うまく説明できなかった。

国 語

解答例

大問一		解答
問一	1	⑥
問二	2	③
問三	3	⑤
問四	4	⑤
問五	5	④
問六	ウ	6 ④
	エ	7 ②
	オ	8 ⑤
	カ	9 ③
	キ	10 ④
問七	11	②
問八	12	②
問九	13	⑥
問十	14	④
問十一	15	③
問十二	16	⑤
		⑥

順不同

大問二		解答
問一	17	④
問二	イ	18 ④
	ウ	19 ⑤
	オ	20 ⑤
	カ	21 ①
	キ	22 ④
問三	23	④
問四	24	⑤
問五	25	③
問六	26	③
問七	27	②
問八	28	⑤
問九	29	⑤
問十	30	③
問十一	31	⑤
問十二	32	③
		⑤

順不同

大問三		解答
問一	33	②
問二	34	②
問三	35	③
問四	36	①
問五	37	⑤
問六	38	④